



近代スポーツの誕生と発展 (2)

帝京大学 観光経営学科

教授 石井 昭夫

6. ラグビーとサッカーの分化

1) ケンブリッジ・ルールとフットボール協会の結成

エリート中のエリートが集う大学では、民衆フットボールは禁止されてきた。しかし、ラグビー校アーノルド校長の思想に共鳴し、スポーツ、とくにフットボールとクリケットを、勇敢さ・不屈の精神・無私の献身・チームワークといったリーダーに不可欠な精神を涵養する最善の機会と考えるようになったパブリックスクール出身の大学生たちは、大学でもフットボールを行うようになった。とくにケンブリッジ大学では、ラグビー校出身者によってフットボール・クラブが誕生したが、競技ルールは、当然ながらラグビールールであった。しかし、ケンブリッジ大学にはラグビー校以外のパブリックスクール出身者も多いわけで、当然ラグビー派のフットボールとそれ以外のフットボール派が対立し、競技をする上でどうしてもルールの調整が必要になってきた。そこで1846年に両派の代表が集まって協議するが中々まとまらず、最終的に、手に持ったまま走るランニングインを否定したほか、全体として反ラグビー的なルール(ただし成文は残っていない)が採用された。これがケンブリッジ・ルールといわれるものの始まりである。

その後もラグビー派は自分たちのルールに固執したが、カレッジ対抗試合などでは次第にケンブリッジ・ルールが多用されるようになっていく。ケンブリッジ・ルールは、その後1856年と1863年に改定されて確定した。1863年の改定に際しては、大学外のロンドンの一般のクラブも加わって、2つのタイプのフットボールを統合しようと協議を開始し、そのための会合は5回に及んだという。対立点は、①ボールを手や腕で持ったり、叩いたりしてよいか、②脛蹴り *hacking* を認めるか、の2点であった。

しかし、結局ルールの統一はできず、サッカータイプの支持グループは、この年1863年にフットボール協会 *Football Association* (FA) を結成し、協会に集まった彼らは通称協会 *association* 派と呼ばれ、短縮して *soccer* (サッカー) の呼称が生まれた。つまり、サッカーとはこの時生まれた「協会派」のフットボールを指すわけである。その後FAは急速に発展し、1867年に州対抗試合を実施、1871年には加盟クラブのトーナメント・カップとしてFA杯を創設した。その後さらに地方に設立されたFAを逐次吸収し、1883年に名実ともにイングランド全体のサッカー統括団体となった。この時期、パブリックスクール卒業生(社会の重要な地位を占めるエリートが多い)を中心に教区や職場に多くのFAが組織され、サッカータイプのフットボールは大きく発展した。

2) ラグビー・フットボール・ユニオン (RFU) 結成

ラグビー派のフットボールは旗色が悪く、とくに膝蹴りの評判が悪かった。そこで、1871年、ついに膝蹴りを禁止するルール改正を行うとともに、ラグビー校の卒業生を中心に、ラグビー・フットボール・ユニオン (RFU) を結成する。その後この RFU がラグビー・フットボールの全国の統括団体になっていくのである。

7. 大衆化からプロ化へ

パブリックスクールでのフットボールが卒業生を通じて広がり、地域や職域のクラブが結成されて様々な対抗試合が行われるようになると、大衆化の原因であり結果となる二つの現象が顕著になる。ひとつは有力クラブの試合が多勢の見物客を集め、「観衆」が成立したこと、もうひとつは、観衆が生まれたことで勝つために有力選手を確保する必要が生じ、そのために金銭を支払うクラブが出てきたことである。金銭支払いの最初の例としては、1878 - 79年のシーズンに、ランカシャーのクラブがスコットランドから選手を「輸入」し、それに対して支払いをしたことが確認されている。

『非労働時間』の生活史』によれば、これがサッカーのプロ化への第一歩となり、その後、観衆の増加とプロ選手の増加の相互作用によってプロ化への道を進む。入場料収入の増加⇒人気チームの財政が豊かになる⇒選手を引き抜いて強化する⇒さらに強くなって熱烈なファンが誕生する⇒郷土意識の高揚⇒もっと強い選手がほしい⇒一段とプロ化が進む、という結果となり、プロ化の是非が大きなテーマとなってきた。実際、1871～1882年までは、ロンドンとその周辺のジェントルマンないし中流階級のチームが競技会で常勝していたが、1883年以降は逆転し、プロ化した北部のチームが勝利を独占するようになったのである。

8. アマ対プロの対立

もともと英国国民は賭け好きで、どんな競争でも賭けの対象にする傾向が強かった。これには弊害も多かったため、スポーツを自主的に行う者と雇われて行う者が区別され、勝つことだけを目的としない精神性をスポーツマンシップとして重視する姿勢も生まれていた。例えば競馬は賭けの対象とされたが、乗馬するジェントルマンは、雇われて乗るジョッキーに対して、アマチュア（余技として行う者の意）という言葉が使われた。それゆえ、プロ化へ向かう必然性ととも、アマチュアリズムを重視するスポーツの本質をめぐる論争が起こるのもまた必然の成り行きであった。

1) サッカーのプロ化

そのため、サッカーのプロ化という問題は、スポーツ関係者以外の一般の知識人、社会人を巻き込む議論に発展した。プロ化を批判する側の意見は概要以下のようなものであった。1) プロは本来楽しみのはずのスポーツを金銭目的の職業に変えてしまう。2) プロとして訓練を積み、定期的に試合をしているプロにアマがかなうわけがないから、アマチュアリズムを破壊してしまう。ひいては、ジェントルマンはプレイのために金銭を受け取るわけにはいかないから、国の伝統的理想像まで破壊する。3) プロは盛んであった地方の対抗試合を衰微させ、大都市の支配をもたらす傾向がある。4) プロは生活がかかってい

るから過度に勝つことに集中する。5) プロ professional の真の意味は「教える人」なのに、フットボールのプロはその役を果たしていない。

フットボール協会 (FA) は、1882 年、選手への金銭の支払いを禁止するルールを制定した。しかし、これは守られず、1884 年には FA と北部諸チームとの対立が頂点に達し、ついに翌 1885 年 FA はプロ選手を条件付で容認する。その条件とは、プロ選手は、1) FA の役職に就くことができない、2) FA の集会で特定のクラブを代表することはできない、3) FA の特別の許可がない限り、1 シーズンの間必ず 1 つのクラブに所属していなければならない、などであった。北部の有力クラブは条件をのみ、プロ選手を管理する権限をアマチュアに残すという FA の決定を受け入れた。1888 年には、北部の 12 のプロチームが新たにフットボール・リーグを結成するが、彼らは FA の傘下を離れなかった。

他方、南部のアマチュアのクラブは、1893 年に独自に FA アマチュアカップを創設して自らのトーナメント競技会を実現し、サッカー式フットボールは、FA のもとでプロとアマが共存する体制となった。

2) ラグビーのアマとプロ

ラグビーでも、やはり北部のランカシャー、ヨークシャーなどを中心に、大衆化の進展に合わせてプロ化が進行した。実際問題として、勤労者を試合に出場させようとするれば、その間の給与を補填する必要があったのである。北部チームに強力な選手が増え、1888-89 年度から始まったラグビーの州対抗選手権大会で、サッカーの場合と同様、南部は北部にまったく歯が立たなくなった。

しかし、RFU は FA と違ってプロを断固として容認しなかったため、北部の 22 のクラブが RFU を脱退して北部ラグビー・フットボール・ユニオンを結成して分裂した。ラグビーの全国統括の体制がサッカーと異なるのはこのためであり、その結果、世界展開への道も異なるものとなった。

3) パブリックスクールの対応

パブリックスクールは、圧倒的なサッカーの大衆化とプロ化に背を向けてサッカーから撤退し、校内球技としてはラグビーとクリケットに力を注ぐようになる。その傾向は、パブリックスクールからグラマースクール (公立中学校) にも拡大した。

20 世紀に入って一段とアマチュアのラグビークラブが増大して、RFU はアマチュア・ラグビーの統括団体として今も健在である。かくてラグビーは、サッカーに比べ、よりジェントルマン的、ないし中流階級的なスポーツとして今日に至っている。

9. 古代オリンピックの復活へ

プロスポーツの発展の一方で、過度に勝敗にこだわるのではなく、スポーツに精神的成長と道徳教育を求めようとするアマチュア・スポーツ振興への思いは、古代ギリシャのオリンピック競技会を新時代に合わせたスポーツイベントとして復活させようとの発想に導く。周知のとおり、近代オリンピックの第 1 回大会は、フランスのピエール・ド・クーベルタン (男爵、1863~1937) の尽力によって、1896 年、ギリシャのアテネで開催された。クーベルタン男爵は由緒あるフランス貴族の家に生まれたが、貴族の血を大切に思う一方

で、共和主義的な思想の持ち主でもあり、当時の人々からすれば、およそ考えられない世界規模のスポーツ競技会を企画し、難産の末実現させたのであった。

1) ピエール・ド・クーベルタン

なぜオリンピックの推進者がスポーツ先進国の英国でなく、スポーツ後進国フランスから出たのか。クーベルタンは漠然と教育者の道を志していたが、行くべき道が見つからず、1883年20歳のときに英国に渡り、パブリックスクールや大学など、英国の教育制度について研究した。ジョン・J・マカルーン著（柴田元幸他訳）「オリンピックと近代：評伝クーベルタン」によれば、クーベルタンは、1886年、ラグビー校校長だったトマス・アーノルドの墓前でひとつの天啓を得たという。それはアーノルドが主導したスポーツによる青少年教育という思想であり、これを貴族階級だけでなく、ブルジョア階級や最終的には労働者階級にまで広めたいという彼の活動目標を得たばかりか、1883年から1887年にかけて英国との間を往復する間に、古代ギリシャの民族祭典であった古代オリンピック大会を世界規模で復活させようという途方もない理想を追及する力を得たのであった。

時代の政治的背景やスポーツ界の情勢を考えれば、到底実行不能のように見え、20歳を過ぎたばかりの徒手空拳の青年の夢が叶うとは誰も思わなかったのだが、そのわずか10年後に近代オリンピック大会開催の実現にこぎつけたクーベルタンの、理想追求のエネルギーと生来の政治力は驚嘆に値する。

2) 時期尚早

クーベルタンが古代オリンピック復活の夢の実現に向かって若きドン・キホーテのごとき活躍を始めた1880年代から90年代にかけての時代は、帝国主義の最盛期であり、ヨーロッパは大きな変革のさなかにあった。普仏戦争に勝利したプロイセンを中心にドイツ帝国が成立して勢力を伸ばしつつあり、負けたフランスは軍隊の強化にはげみ、外ではヨーロッパ諸国が競って植民地争奪戦を繰り広げていた。競争の時代であり、国際協調やフェアプレイの精神とは相反する時代風潮であった。国際的なスポーツイベントを発想すること自体、理念はともかく現実の問題としてはほとんど相手にされなかった。

当時のスポーツ界は、競技スポーツを生んだ英国ですら、ようやくスポーツの大切さが社会的に認知されてきた時期であり、大陸諸国にはまだ競技スポーツはほとんど広がっていなかった。フランスでは体操、射撃、軍事教練、徒歩旅行、それに自転車競走くらいで、クーベルタン自身が競技スポーツの振興努力を始めたばかりであった。要するに、スポーツ競技自体がまだ普及段階で、個別種目の国際試合すら存在しなかったのである。

ドイツやスウェーデンでは体操が主流であった。体操とスポーツの違いは運動の内容というより、観点の相違といったほうが適当である。スウェーデン体操を生んだP.H.リングの理念は、運動技術の熟練や意志の鍛錬は二の次で、身体を健康を直接の目的としていた。言い換えれば、身体的欠陥を除去し、健康の維持管理をはかる技術としての人為的運動を開発し普及させることを重視していた。考えの根本は生理学などの科学にもとづく肉体の運動の体系づくりであり、そうした観点からすれば、英国で展開する競技スポーツはレクリエーション活動に過ぎず、まじめに取り組むに値しなかったのである。

3) 万国博覧会とオリンピック

そのような時代に、国際スポーツ大会など時期尚早で、趣旨はともかく実行不能と思われていたのだが、クーベルタンはどのようにしてその壁を乗り越えたのか。それにはヨーロッパ人のヨーロッパ外への関心を飛躍的に掻き立てつつあった万国博覧会（以下万国博）が大きく関わっている。

1851年にロンドンで開催された最初の万国博 The Great Exposition of Industry of All Nations は、ヨーロッパ中に大きな反響を巻き起こした。産業振興のための国内レベルの博覧会なら、産業革命の進展に合わせて、フランスをはじめヨーロッパ各国で何度も開かれていた。とくにフランスは、革命後の共和政府がイギリスに追いつくために1798年に国内産業博覧会をパリで開いたのをはじめ、1849年までに11回もの博覧会を開催している。なかでも1849年のそれは、会期は6ヶ月におよび、フランスの海外植民地からの参加もあって、万国博に準ずる規模であった。しかし、フランスは産業技術の漏出を恐れて国際的行事に発展させることをためらっていたためイギリスに先を越された（鹿島茂著「絶景、パリ万国博覧会」）。

これに対し、英国のヴィクトリア女王の夫君アルバート公の発案になる1851年のロンドン万国博は、それまでのイベントとは全く性質の違うものだった。産業先進国であり、最大の植民地帝国となった英国は、自信をもって世界各国に出展を呼びかけ、最先端技術の粋を集めた産業の機械・器具はもとより、世界中の珍しいものを集めて展示した。人類が創造したものは何でも取り上げ、文学も美術も、また、ヨーロッパには存在しない植民地の動植物なども含まれていた。

ロンドン万国博は人類最初の国際的大スペクタクルであり、141日の会期中にロンドンの人口の3倍、英国の人口の3分の1に当たる600万人もの観客を惹きつけたのであった。ヨーロッパ中の新聞がこの世界規模の大イベントについて書きたてたが、興味深いことに、万国博人気に沸騰するロンドンを象徴的に表現すべく、週刊誌『スペクテーター』（1828年創刊）は「この産業のオリンピック、この産業の^{トーナメント}武芸競技会」というメタファー（比喻）を使ったし、また、アメリカ人ジャーナリストは「史上初の偉大なる全世界的な産業のオリンピアード」と形容するなど、言葉としてのオリンピックは、すでにある程度親しいものになっていたことが伺える（「オリンピックと近代」）。

4年後の1855年には第2回目の万国博がパリで開催され、その後、各国の首都ないし首都に準ずる都市で競って開催されるようになり、ありとあらゆるものが展示された。科学技術の発展は無限に新しいものを生み、人類を豊かにし、世界を狭いものにし、未来はあくまで明るく、人々は無限にオプティミスティックでいられた時代であった。

クーベルタンが初めて万国博を見たのは、15歳のときに開催された1878年のパリ万国博であった。普仏戦争に敗北し、パリコミュンを経て、フランスが共和制下に科学・技術・経済・社会のあらゆる面で英独に比肩するヨーロッパの大国であることを改めて示したものであった。15歳のクーベルタンがこの万国博で時代の空気をたっぷり吸い取ったことは想像に難くない。しかし、フランスは、1878年の万国博は次なる万国博のリハーサルであったかのように、終了から時を経ずして、早くもフランス革命100周年に当たる1889年のパリ万国博の構想を練り始めていた。エッフェル塔がシンボルとなる1889年のパリ万

国博は、振り返ってみれば、近代オリンピック大会開催へ向けての小さな一歩でもあったのである。

万国博は世界中から多数のオピニオンリーダーが集まる絶好の機会であったため、多くの国際会議が万国博期間中に開催されるのが通例になっていたが、オリンピック復活を夢見ていた弱冠 26 歳のクーベルタンは、万国博組織委員会に働きかけて「スポーツに関する国際会議」の開催にこぎつける。会議は大きく分けて 5 つの部門（乗馬、体操と射撃、ボートと水泳、陸上競技）に分けて開催された。会議自体はほとんど注目されなかったが、会議の一環としてリセ（中等学校）の生徒たちによるスポーツのデモンストレーションが行われた。クーベルタンは、これによってスポーツが国際的イベントの一部に組み込まれるという事態を初めて体験した。

1889 年の万国博の会場となったシャンドマルスは、革命後の総裁政府（1795－99）がかつてオリンピックという名を冠して競技会を開催した場所であったこと、折からベルリン大学の歴史・考古学教授エルンスト・クルチウスを中心とするドイツ・チームがオリンピアの発掘調査中であり、その発見に基づく精巧な模型が万国博会場に展示されたことなどに刺激されて、クーベルタンは、オリンピック大会復活の夢を大きく膨らませることになったのである。

4) パリ国際スポーツ会議

1889 年の万国博後、クーベルタンは持ち前の積極さとエネルギー、貴族の地位と財力を背景に、ばらばらに国内レベルのみで開催されている各種のスポーツ競技会を、古代オリンピック復活という形で統合しようとする機会を使って画策した。クーベルタンがオリンピック競技会開催を公の場で初めて提案したのは、彼自身がフランスのスポーツ振興のために結成した「フランス競技スポーツ協会連合（USFSA）」の 5 周年記念式典（1892 年）においてであった。クーベルタンは、この式典で熱烈にオリンピック競技会の開催を呼びかけたがほとんど反応がなく、失意のうちに翌 1893 年にアメリカ旅行に出かけていく。

アメリカで多くのスポーツ関係者と会見し、オリンピックの夢を語り、気を取り直して 31 歳の誕生日前夜にフランスに戻ったクーベルタンは、1894 年 6 月に「パリ国際スポーツ会議」開催を主導することになった。この会議はアマチュアとプロの資格問題を討議するために開かれるものであったが、クーベルタンは一方向的にオリンピックの復活開催を中心議題として持ち込み、いささか強引に《1900 年に第 1 回の近代オリンピック大会をパリで開催する》旨の決議案を用意した。彼は国際会議のもつ精神的高揚の効果を十分に計算に入れ、古代ギリシャ文明の輝かしいイメージを新しいスポーツの祭典に結び付けつつ会議を誘導し、ついにクーベルタンの決議案は会議最終日の 6 月 23 日満場一致で採択され、併せて国際オリンピック委員会（IOC）の設置も決められた（それゆえ、後に 6 月 23 日はオリンピックデーに定められた）。ところが、会議開催中に第 1 回大会まで 6 年も待つのは長すぎるという声次第に強くなってきており、クーベルタンは突如ギリシャ代表との簡単な協議のあと、最終日の興奮の中で再度議決が行われ、わずか 2 年後の 1896 年にアテネで第 1 回大会を開催することを決定したのであった。

この時クーベルタンが提示した近代オリンピック開催の条件は；

- 1) 参加資格はアマチュアに限る
- 2) 成人男子に限る（第5回以降は女子も参加）
- 3) 開催地を固定しない
- 4) 4年に1度開催する

というものだった（武田薫著「オリンピック全大会」）。クーベルタンはスポーツのもつ普遍性に注目し、世界規模でのスポーツの大会を回り持ちで開催する構想を初めからもっていたのであった。

5) 第1回アテネ大会の成功

決議は成ったが、各国代表が帰国してから、どれだけオリンピックへの参加に努力してくれるかが心配であった。そして、事実酔いが醒めるのも早かったのである。第一は、開催国に予定されたギリシャの反応であった。「わが国は重大な経済危機の渦中にあり、文明国と呼ぶにふさわしい生活の基本すら十分に達成されておらず、スポーツ競技の概念すら存在しない新興国ギリシャには、そのような大それた大会を主催する財源も力もないので、是非パリでやってください」というトリクーピス首相直々の辞退表明であった。

アテネでの開催自体は、曲折を経て当時のゲオルギオス国王とコンスタンチヌス皇太子の強い意思によって決定したが、各国の参加意欲は低く、参加選手を集める仕事はクーベルタンの双肩にかかっていた。世界初の国際スポーツ競技会ということで、スウェーデン、ドイツ、ハンガリー、アメリカなどは歓迎の意思を表明したが、クーベルタンの足元のフランス政府は選手を送る経費負担を拒否、英国は大英帝国競技会の開催が先だとして消極的だった。

それでも開催国となったギリシャの官民上げての準備により、第1回アテネ大会は開催された。古代競技場跡に5万人収容可能の大理石の競技場が建設され、ギリシャ国民は担った榮譽に興奮したが、参加国は14カ国、集まった競技者数はエントリーの規則があいまいだったのでいろいろな数字があるが、武田薫著「オリンピック全大会」によれば合計241人で、そのうち200人がギリシャ人であったという。多人数の代表団を送り込んだ外国はアメリカ（時間が自由な学生ばかり）だけで、熱心だったハンガリーからは8名が参加したが、フランスは長距離走者1名、自転車2名、フェンシング4、5名のみ、英国は物見遊山気分の大学生が個人の資格で6人、デンマーク4人、ドイツ3人、スウェーデンとイタリアが各1人といった具合で、スイス、オーストリア、ブルガリアなどは開幕ぎりぎりになって選手が現れるという有様だった。クーベルタンの遠大な理想はほとんど理解されておらず、実現できたのが不思議とさえ思える状況だった。

それでも、第1回アテネ大会は、スポーツのみの国際的イベントを初めて開催できたという意味で成功だったとあっていいであろう。「オリンピックと近代：評伝クーベルタン」は、第1回アテネ大会の観衆の熱狂振り、種目ごとの競技の模様を詳細に伝えていて興味深い。5万人収容とされる新設の競技場内（座席はベンチ式）は超満員で5万人～7万人、競技場の周辺には少なくともその2倍が集まり、合計12万人以上と推定されるオリンピック目当ての人々が押し寄せていた。開会はギリシャ国王によって宣言され、詩人コスティス・パラマス作詞、オペラ作家スピロス・サマラス作曲のオリンピック賛歌が、大オーケ

ストラの演奏とともに謳われ、華やかなセレモニーが続いた。ちなみに、このオリンピック賛歌は、楽譜が紛失したとしてその後演奏されなかったが、1964年の東京大会に先立つ1958年に発見され、古関裕而^{ゆうじ}編曲、NHK交響楽団演奏によって復活し、IOCの承認を得て東京大会で演奏された。これによりこの曲が正式のオリンピック賛歌と認定された。

開会式に続いて行われた陸上競技は相次ぐアメリカ人の圧勝であった。ギリシャ以外ではどこもやっていない円盤投げにまで、突然参加した初体験のプリンストン大学の学生が勝利し、ギリシャ人をがっかりさせた。結局、陸上競技11種目中アメリカが9種目優勝とほぼ1人勝ちであった。

アテネ市内はこの歴史的行事に沸いたが、人気の中心はアメリカ人と、おそろいのユニフォームで自国のPRに努めたハンガリー人であった。しかし、なんと言っても第1回大会のハイライトは、最終日に行われたマラソン・レースであった。古代ギリシャの故事に倣ったとされるマラソンだが、古代オリンピックで最も長かったレースはトラック内を12周する4,800メートル競走（ドリコス）であり、それ以上走ることは野蛮とされ、ロードを走るレースなどは問題外であった。歴史学者ミッシェル・ブレアルが進言し、クーベルタンが共鳴して実現したマラソンは、アテナイの勝利を走り伝えたという伝承の物語を競技に変容させたもので、第1回からオリンピックのハイライトになったのであった。

マラソンを出発しアテネの競技場に至る約40kmのレースは、30km過ぎまではフランス人（レルミュジオー）やロンドンのクラブに所属するオーストラリア人（フラック）が1、2位を走り続けたが、33km地点でギリシャのスピリドン・ルイスがトップに立ち、終わってみれば1位から3位までをギリシャ人が独占していた。初日から10日間の会期中途中でだれ気味になった第1回オリンピックは、最終日のマラソンにギリシャ人が圧勝したことによって大きな盛り上がりを見せた。オリンピック期間中国王は経験したことのない圧倒的な市民の支持に感激し、表彰式や閉会式では参加者全員が感動に酔いしれていた。

その間、クーベルタンはどうしていたのか。近代オリンピック復活の最大の功労者であり、初代のIOC事務局長（初代会長はギリシャ代表、2代目がクーベルタン）に就任していたが、彼は開会式でも歓迎レセプションでも、また、表彰式や閉会式でもほとんど無視され、まったく出番も与えられなかった。しかも、ギリシャはクーベルタンの理念に反し、以後の大会は固定してギリシャで行うことを提案するなど、終始クーベルタンを無視し続けたのであった。それでも彼は、第1回アテネ大会の圧倒的な盛り上がりの真の価値を誰よりもよく知っていたがゆえに、当面は感動で憤りも忘れていたのであった。

ちなみに、アテネ大会の観衆の95%はギリシャ人だったが、オリンピック観戦客向けの割安ツアーを組もうというクーベルタンの試みは〈多少〉うまく行き、仲間二人の協力を得てパリ～アテネ間の鉄道運賃1等往復割引300フランを確保できたし、マルセイユ発アテネ行きの『セネガル号』には200人が乗船した記録があるという（ピレウス港に停泊して観戦）。また、英国からはトマス・クックが独占権を得てオリンピックツアーを組織したが、その裏ではドイツ皇帝妃が娘のギリシャ皇太子妃のために、ジョン・クックに特別に依頼したと伝えられている。ジョン・クックは、旅行者にとって快適な環境とはいえないギリシャへの送客に工夫をこらし、オリンピック後にギリシャの国際交通に貢献した功績で四等勲爵士に任じられたという。

10. 無視されるクーベルタンの理念

上掲の「オリンピックと近代：評伝クーベルタン」によれば、クーベルタン家は著名なギリシャ彫刻『2匹の蛇に咬まれるラオコーン像』が出土した（1506年）イタリア貴族の家系に由来する名門の家柄である。ラオコーンはギリシャ神話に登場するアポロン（またはポセイドン）の神官で、トロイ戦争の末期、ギリシャ軍が浜に残していった木馬を謀略であると見抜いて城内に入れないように警告するが聞き入れられず、その結果として海岸で子供とともに2匹の蛇に咬まれて命を落とす。ピエール・ド・クーベルタンは、自家に関わりのあるこの物語を度々読み、その意味するところは《真実がなかなか理解できない人々に対し、真実をあまりにしつこく告げた者が迎える運命である》と解釈していたという。上掲書は、冒頭の第1章に「悲劇の予感」というタイトルをつけ、超人的な働きで近代オリンピックの復興に成功したものの、その発想が早過ぎたゆえに、人々に無視され、悲惨な最期を遂げる運命を暗示しながら筆を進めている。

事実、第2回～第4回のオリンピック大会は、独立したイベントとして開催できていない。第2回のパリ大会（1900年）は、同年開催される予定だったパリ万国博の枠内の事業として開催されることになったが、当初クーベルタンは万国博のもつ国際主義を信じるがゆえに、オリンピックが万国博の華になるであろうと信じていた。しかし、それは大きな間違いであった。アテネ大会を成功させたのは、何よりも、スポーツ競技会として独立した時間と空間をもったゆえの高揚だったのである。万国博の委員たちはスポーツについては何も知らず、アテネで開かれたオリンピックについても無知であった。このような人たちはクーベルタンを相手にせず、総合的なスポーツ展示を併催してスポーツ振興に役立てようとしたクーベルタンの提案はあっさり退けられ、あまつさえ、オリンピックの名前も消されて「万国博覧会附属国際競技大会」とされてしまったのである（広畑成志著「アテネからアテネへ」）。何しろ6ヶ月もの会期中にばらばらに行われ、他にプロによる競技会等も併催されたから、何がなんだかかわからず、優勝者がオリンピックに参加したことすら知らないままだったというケースさえあったという。

第3回のセントルイス大会（1904年）はもっとひどかった。本来はシカゴで開くはずだった大会をアメリカ側の事情で田舎町セントルイス（万国に合わせた）で開く羽目になったのだが、飛行機もない時代、旅費を自弁してセントルイスくんだりまでやってくる選手は少なく、参加国は12カ国、参加者合計651人のうち500人がアメリカ人だった。第4回（1908年）はローマで開催の予定が、1906年にヴェスビオ火山が爆発して大きな被害が出たため急遽ロンドン開催に変更され、6ヶ月会期の英仏博覧会の添え物として開かれた。当時大阪毎日新聞の特派員としてロンドンにいた高石真五郎（のちのIOC委員）は、「ロンドンにいるにはいたが、はずかしいことに、オリンピックとはなんなのかさっぱり知らなかった」と語っている（清川正二「オリンピックとアマチュアリズム」、「オリンピック全大会」より引用）。スポーツはまだ独立した国際イベントとして開催するにはいささか時期尚早で、自動的に人が集まる万国博の庇を借りて開催するしか選手や観客が集まらないと思われていたのであった。

11. 近代オリンピックの基礎固め

1912年の第5回ストックホルム大会は、16年ぶりに独立したオリンピック大会として復

活（会期は5月5日から7月22日）し、28カ国から2704人の選手が参加した。ロンドン大会時には、オリンピックに選手を派遣する国内委員会（NOC）はヨーロッパと北米の12カ国だけだったが、この大会までに新たにアジア、アフリカの9カ国に広がり、のちに近代オリンピックの基礎を築いた大会と評価されることになる。日本の初参加もこの大会で、クーベルタンから日本体育協会（1911年設立）初代会長嘉納治五郎へ招待状が届き、アジアから初の参加者として、日本の三島弥彦と金栗四三^{かなぐりしそ}の2人の陸上選手が嘉納治五郎団長と大森兵蔵監督とともに参加した。

第6回のベルリン大会（1916年予定）は、1914年8月の第一次世界大戦勃発によって中止となった。戦争を中断してまで行われた古代オリンピックのようにはいかなかった。戦火はすぐに終わるだろうとの希望は打ち砕かれ、1年たち、2年経っても戦火は続き、その間に国際オリンピック委員会の本部も戦火を避けてパリから中立国スイスのローザンヌに移転し、結局オリンピックを開くことはできなかった。IOC創設者のクーベルタンもローザンヌに移り、死を迎えるまでここに住み着くことになる。

第7回のアントワープ大会（1920年）では、戦火を経てクーベルタンの理想に一步近づく発展があった。この大会からクーベルタン自身のデザインによる「5大陸をつなぐ輪」の五輪マークが掲げられるようになったし、「私たちは騎士道精神にのっとり（のち競技者の名誉にかけてに変更）、国（のちチームに変更）の名誉とスポーツの栄光のため、オリンピックに参加することを誓います（のち約束するに変更）」という選手宣誓も初めて行われた。

クーベルタンは第8回パリ大会（1924年）を最後に、1925年IOC委員長の職を去った。「オリンピックと近代」は、クーベルタンの功績は、第1回のアテネ大会を実現に至らしめたこと以上に、アテネ以後第5回ストックホルム大会で独立のオリンピックが復活するまでの16年間（オリンピックの暗黒時代といわれる）、「あくまで希望を捨てず、途絶えることのなかった忍耐強い、決して英雄的とはいえない尽力の数々によって、オリンピック大会が世紀末の奇妙な事件として忘れ去られずに復活させ得たことである」と称えている。

引退後10年余の1936年、第11回ベルリン大会をヒトラーが国威を発揚する場にしたり、クーベルタンは財産を使い果たし、世間から忘れられ、窮状を見かねた支援者たちが提供する小住宅に住む一老人となっていた。家庭の不幸にも苦しめられ、1937年ジュネーブのラグランジュ公園で散策中に倒れ、看取るものもなく74年の生涯を閉じた。

近代オリンピック誕生の物語を読むと、確かに時代はオリンピックのようなスポーツの世界大会を開催するにはほんの少し早かったかとの感慨を禁じえない。しかし、時代はやがて追いつき、多くのスポーツがオリンピックに参加することによって純化され、成長し、発展していったことはその後の歴史が示すとおりである。

12. 万国博からオリンピックへ

かつてオリンピック大会を添え物にした万国博のほうは、19世紀の後半から20世紀の前半にかけて、先進国家の威信を示すために頻繁に開催された。万国博は何よりも産業の展示であり、人類の到達した進歩を誇示し、知識の開発と啓蒙の絶好の機会であると同時に、帝国主義時代における国威発揚の場でもあった。吉見俊哉著「博覧会の政治学」は、博覧会が目的とした役割について、「博覧会の時代と呼びうるものがあつたとするならば、それ

は1851年のロンドン万国博で開幕し、1940年前後ではほぼ幕を閉じたということができると述べている。これに続く部分を少し長い引用してみよう。

ナチズムとスターリニズムが向き合い、また、ファシズムへの抗議の場となった1937年のパリ万国博、空前のコマーシャルイズムの祭典の場となった1939年のニューヨーク万国博、実現はしなかったが、オリンピックとの同時開催をもくろんだ1940年の東京万国博構想とムッソリーニが準備した壮大な規模の1942年のローマ万国博構想など、第二次世界大戦直前の世界では、様々な政治体制がそれぞれ自己の世界像に向けて大衆を動員していく有力な装置として万国博覧会を開催ないし準備していった。しかし、大戦が終わり、冷戦構造が定着していくと、博覧会の政治的文化的影響はずっと小さなものとなっていく。むしろ、戦後も58年のブリュッセル博、62年のシアトル博、64年のニューヨーク博、67年のモンリオール博と、数度にわたる万国博が開催されてはいる。だがこれらは、いずれも大戦前までの万国博が示したような同時代の大衆への影響力を保持してはいない。かつて、博覧会が独占していた大衆のまなざしを商品世界に向けていく文化装置としての機能は、戦後はむしろ見本市やテレビコマーシャルに取って代わられていくのである。」

事実、半年程度の短期間だけのパビリオンの仮設展示に大金をかける価値は乏しくなり、万国博の展示はおざなりのものが増えていった。世界のあらゆる珍しいもの、新しいものを集めて限定期間だけ展示する世界博覧会の形式は、第一に、最新技術を展示する産業見本市がこれに取って代わり、第二に、かつての万国博覧会を彩った動植物館や人々を楽しませるための工夫は、ディズニーランドその他の多くのテーマパークや常設の展示施設を上回ることは難しくなっている。

それゆえに、万国博を開催しようとする先進国はほぼなくなって久しいが、添え物であったオリンピックの方は、はるかに大きい広がりを見せ、開催希望国はめじろ押しという主客逆転して久しい。

13. オリンピックとサッカー

今日では、大型の国際スポーツイベントも数え切れないほどある。その中でも、規模の大きさと人気度では、オリンピックとサッカーW杯が双璧である。この二つのイベントは様々な意味で対角的で、スポーツの二つの側面を代表しているといっていであらう。オリンピックは、マイナーなスポーツをも含む多種多様なスポーツの祭典となり、冬季のオリンピックも独立させて、裾野の広いプレイヤーを一堂に集めている。クーベルタンの理想を反映してアマチュアリズムに立脚し、弱い国の弱い選手も参加している。他方、サッカーW杯の方は単一種目の競技会で、地域別の予選を勝ち抜いた者のみの、最強のチームとプレイヤーが力を競うプロの世界である。

以上、スポーツの歴史をサッカーとオリンピックを通してみてきたが、ここで両者の関わりについて振り返ってみておこう。オリンピック大会は、既述のとおりクーベルタンによって初めからスポーツによる国際親善を標榜し、単一種目が国際競技会を始めるよりも前に世界イベントとして発足した。早過ぎたために初めの数回は惨めな失敗に終わったが、定着するや着実に拡大し、巨大イベントとして大きく発展をとげた。

他方、サッカーの国際展開はそう早くはなかった。20世紀に入る頃からイギリス以外の国でも競技が行われるようになったが、国際試合はオリンピックに参加することによって始まっている。第1回のアテネ・オリンピック大会でも、非公式にアテネとイズミール（トルコ）とスウェーデンのチームが試合をしたという記録があり、第2回のパリ大会ではイギリスとフランスとベルギーの3チームが参加、第3回のセントルイス大会ではアメリカの2チームとカナダの1チームが参加している。しかし、これらは国の代表というより、たまたま参加したクラブや、急造の寄せ集めたチームによる試合に過ぎなかった。

1904年にヨーロッパ大陸8カ国（オランダ、スイス、スウェーデン、スペイン、ドイツ、デンマーク、フランス、ベルギー）のFAが国際フットボール連盟（FIFA）を結成し、これにイギリスの4つのFA（イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド）が参加することで国際競技の体裁を整えていく。そして、1908年の第4回ロンドン大会でサッカーは初めてオリンピックの正式の種目になるが、参加国はフランス、デンマーク、イギリス、オランダのみであった。いずれにしても、世界の国々が集まって競技する機会がオリンピック大会だけという期間が長く続いたのである。

1924年の第8回オリンピック・パリ大会は、第一次大戦後の世界にスポーツ競技が広まったことを示した大会であったが、サッカーの参加についても、アントワープ大会（1920年）の14カ国から、いっきに22カ国（ヨーロッパ外からはトルコ、エジプト、アメリカ、ウルグァイの4カ国）に増えるとともに、南米から初参加したウルグァイが優勝して世界を驚かせた。ついでながら、ウルグァイは次のアムステルダム大会（1928年）にも優勝し、南米サッカー強しの印象を世界に植え付けたのであった。

しかし、その2年後の1930年にサッカーW杯が始まり、徐々にその権威を高めていくにつれて、アマチュアにしか出場資格がないオリンピックに対するサッカー界の関心が薄れていくのは必然の方向であった。プロの出場をめぐる問題は、アマチュア選抜で出場する西側諸国と、国家から報酬をもらうステート・アマによって最強チームを送り込む東側諸国の違いが顕在化し、東側の国がほぼメダルを独占する状態を改善する必要が生じ、曲折を経て1992年から23歳以下という条件でプロ選手も出場できるようになったことは記憶に新しいところである。

オリンピックは、アマチュアであることを参加資格とし、商業主義を排除してきたが、球技を中心に種目別の世界選手権（W杯）がプロ中心の最強の競技者を集めるようになったこと、負担に耐えられないほど大会開催費が巨額化したことで曲り角を迎えた。その結果第7代サマランチ会長の時代（1980～2001年）に、商業主義の容認（放映権料の上昇、企業広告の拡大など）とプロ選手の参加を認めたことによって新しい発展を促した。オリンピック誘致は開催地にとっても関連の企業にとっても絶好のビジネス機会を提供するようになり、新興国の間にも開催希望国が増える結果につながって今日に至っている。

14. スポーツ・ツーリズムの時代へ（むすび）

スポーツ競技会は、プレイヤーや関係者、それに観衆が移動することによって発展する。サッカーその他のスポーツが発展を始めたのは鉄道誕生が大きなきっかけだったし、航空機の発展がオリンピックのような世界競技大会を大きく発展させた最大の要因であった。

言い換えれば、スポーツの国際化は、安価な旅行の可能性、すなわちツーリズムと一体となって発展してきた。今日では、スポーツ競技への参加や観戦のために行う旅行に対して「スポーツ・ツーリズム」の名前が冠せられるようになった。スポーツに限定したツーリストの移動だけを計量することは困難であるが、スポーツ競技会にともなう国際観光客（観衆）の移動に限定した数字をみると、オリンピックやサッカーW杯などの大型イベントの開催の有無によって多少の違いはあるが、平均すると年間約 1,200 万人のスポーツ観戦目的の国際観光客を生み出しているという。インターネット情報 (PDF Ebook : SPORTS TOURISM) から、単一の国際スポーツイベントの国際観光客数の例を見ると ;

* フランスで開催されたサッカーW杯 (1998年)	900,000人
* シドニー・オリンピック大会 (2000年)	111,000人
* サッカー・欧州選手権大会 (2004年)	500,000人
* クリケット・ワールドカップ (2007年)	100,000人

などがある。また、モナコの F1 グランプリ・レースは、毎年 4 日間のイベントで、約 200,000 人の国際観戦客を集めているという。

舞台芸術やコンサートその他、国際観光客を惹きつけるイベントは多様だが、やはりスポーツは、プレイヤーと観客が共有する空間と時間の密度がどれよりも濃いとっていいだろう。勝負の一瞬先が見えないことによる一喜一憂、興奮を高めるひいきチームの活躍など、観客の多さとあいまってスポーツ競技会観戦は、最も現代的な楽しみの一つである。

オリンピックとサッカーW杯を頂点とする国際スポーツ競技会は、ツーリズムの一分野としてこれからもさらなる発展を続けるであろう。

主要参考文献

1. 「英国社会の民衆娯楽」ロバート・W・マーカムソン (川島昭夫他訳) 平凡社、1993
2. 『非労働時間』の生活史：英国風ライフ・スタイルの誕生」川北稔編、リポート、1990
3. 「レジャーの社会経済史」荒井政治、東洋経済新報社、1989
4. 「フットボールの社会史」F. P. マグーン Jr. (忍足欣四郎訳)、岩波新書、1985
5. 「フットボールの文化史」山本浩、ちくま新書、1998
6. 「近代ラグビー百年」池口康雄、ベースボールマガジン社、1981
7. 「オリンピックと近代：評伝クーベルタン」ジョン・J・マカルーン (柴田元幸他訳)、平凡社、1988
8. 「アテネからアテネへ」広畑成志、本の泉社、2004
9. 「オリンピック全大会」武田薫、朝日新聞社、2008
10. 「博覧会の政治学」吉見俊哉、中公新書、1999
11. 「絶景、パリ万国博覧会」鹿島茂、河出書房新社、1992